

教師を育てた 言葉たち

No.005

静岡県・沼津市立沼津高校・中等部

谷野公彦先生

やの・きみひこ

◎教職歴23年。同校に赴任して7年目。教務主任。数学科。

静岡県・沼津市立沼津高校・中等部 全日制／普通科／共学／1学年約200人／2017年度入試合格実績(現役のみ):国公立大は、北海道大、筑波大、横浜国立大などに22人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大などに延べ173人が合格。



初 任校では、たくさんの先生方から、様々なことを教わりました。もちろん、経験が浅い私なりに、授業、クラス経営、部活動などと、それぞれの指導場面で一生懸命に取り組んでいました。でも、今改めて振り返ってみると一つひとつの指導が、それぞれの生徒を理解し、育てるものとして十分に結びついてはいなかったかもしれません。

そんな私に対して、いろいろな先生が折に触れて「生徒への接し方」をアドバイスしてくれました。先生方がそれぞれの言葉で私に教えてくださろうとしていたのは、「生徒に大きな影響を与える教師として、『**もっと自分に責任を持って**』ということだと私は気がつきました。当時、教科指導に力を入れていた私が、「生徒指導、進路指導、教科指導はすべてが互いにつながっている。だから生徒指導の際には、生徒に集団の中で学び、働くという進路指導についても意識させる必要があり、教科指導では、生徒の生活面の変化などの生徒指導にも目を向けなければいけない」と、1人の生徒を多面的に見る教師の責任の重大さを理解したのです。

先輩方からアドバイスをいただいた場面は、今でも鮮明に覚えています。それは、学びの価値が私の成長とともにさらに大きくなり、その言葉が発せられた瞬間がより深く心に刻まれるからかもしれません。他者からの学びが自分の血肉として、変化していく時間と言えるでしょう。

他 者を育てる言葉は、発する側と受け取る側の関係で変わってくるのだと思います。それは、

教師間はもちろん、教師と生徒の関係でも同じです。同様の指導でも、この生徒にはこの言葉で響くけれど、この生徒には別の言葉の方が響くといったことはよくあります。また、同じ生徒への指導でも、タイミングが違えば選択すべき言葉は全く変わります。指導には、「これしかない」という正解が存在せず、時に誤解やすれ違いも起こってしまいますが、それでも恐れずに、自分に責任を持って思いを語り続けるのが、「教師」という仕事なのだと思います。

学校も1つの社会ですから、そこにはいろいろな生徒、先生がいます。何事にも熱い人もいれば、ドライな人もいます。特に最近は、生徒も教師もそうした差異が大きくなっている気がします。それでも私は、「そういう人だから仕方ない」「言っても無駄」などとは思いたくはありません。差異は認めた上で、「この学校では教師も生徒も、誰もが少しずつでも変わりたい、よくなりたくて願っている」と信じて、目の前の生徒、そして同僚へのよりよい言葉を探していきたいと思っています。「いつか、きっと伝わる」という信頼を持ち続ける大切さも、私がこれまでの教師生活の中で学んだことの1つです。

社 会は今、個を尊重する時代です。それは大切な考え方だと思います。ただ、個を尊重することと、それぞれの個が孤立してしまうことは決して同じではありません。どんな声かけが効果的のかなどはまだまだ勉強中ですが、今後も先生方と同じ方向を向いて、日々努力していきたいと思っています。